第二言語・第二文化を記録し記憶する「パフォーマンスウォッチング活動」

”Performance Watching Activity” to record and remember the second language and culture

森井あずさ
MORII Azusa

〔要旨〕

本稿の目的は、Walker & Noda（2000）によって提唱された「パフォーマンスウォッチング活動」の内容と活用法を紹介し、日本での運用を提唱するものである。

Walker、Noda によると、パフォーマンスは　1）特定の時間的状況　2）特定の場　3）特定の役割（立場）4）特定の傍観者（パフォーマンスを記録する人）5）特定の行動（スクリプト）という 5 つの要素によって成り立つイベントとされる（Walker 2008, 228; 野田 2015）。個々のパフォーマンスの記録者はあるパフォーマンスを取り上げ、パフォーマンスの経験を解釈し、仮説を立て、それをテストするさらなるパフォーマンスを試み、その記憶をストーリーとして取り込み、記憶を構築していく。それがパフォーマンスウォッチング活動である。（野田 2015, 44）。

パフォーマンスウォッチング活動は 4 つの段階を経て分析され、報告され、その過程でフィードバックを受けたり自分で発表したりして、中級以上の学習者にとっては第二言語習得の一環ともなる。

Key word: パフォーマンス、パフォーマンスウォッチング活動、第二言語、第二文化、パフォームド・カルチャー

1.　はじめに

立教大学英語教育研究所・異文化コミュニケーション学部主催の公開講演会において、オハイオ州立大学野田眞理教授による「パフォーマンスウォッチング活動」と題する公開講演会が開催された（2018 年 6 月 23 日）。日本ではまだあまりなじみがないがアメリカの大学の外国語教育の一環として行われている「パフォーマンスウォッチング活動」の概要を紹介し、日本における大学の日本語教室でどのように「パフォーマンスウォッチング活動」の手法が活用できるかを考えてみたい。

2.　「パフォーマンスウォッチング」とは

2.1　パフォーマンスの定義

日本語教育における「パフォーマンス」といえば、評価においてどの程度日本語が話せるか、習った日本語をどの程度習得したか、という意味にとらえられることが多いであろう。しかし、パフォーマンスウォッチング活動におけるパフォーマンスとは、Walker & Noda（2000, 199）によれば「ある決まった時間、場所、立場、聴衆によって限定される発話、または行動を実行に移すコミュニケーション行動」（筆者訳）と定義される。言い換えると、パフォーマンスとは

1）特定の時間的状況
2）特定の場
3）特定の役割（立場）
4）特定の傍観者（パフォーマンスを記録する人）
5）特定の行動（スクリプト）

という 5 つの要素によって成り立つイベントとされている（Walker 2008, 228）。個々のパフォーマンスの記録者はあるパフォーマンスを取り上げ、パフォーマンスの経験を解釈し、仮説を立て、それをテストするさらなるパフォーマンスを試み、その記憶をストーリーとして取り込み、記憶を構築していく（野田 2015, 44）。その過程において外国語の使い方を理解していくことも可能であるし、そのシステムを解明することにより、学生のパフォーマンス力の構築の方法を明らかにしていくことも可能であると考えられる。それがパフォーマンスを観察する活動、つまり「パフォーマンスウォッチング活動」である。

野田（2015）によると、パフォーマンスウォッチング活動には 2 つの目的がある。

1）　地域の人が様々な場面で用いているストラテジーを、パフォーマンスの要素を使って分析することによって、意識すること。

2） 分析能力を高めることにより、将来別の場面で見聞きすることもパフォーマンスとして分析できるようになること。

ただし、パフォーマンスウォッチングの目的は決して研究目的の人間観察ではないという（野田 2015, 48）。

川口（2004, 31）は「文脈化」という言葉を以下のように定義している。「特定の文法・語彙項目を指導するとき、その項目が「だれが・だれに向かって・何のために」使われるものであるかを明示して指導すること。」語学学習者の教室におけるパフォーマンスには、この「文脈化」に通じるものがあるという[1)]。つまり、外国語は文法をクラスで教えてもらうだけではなく、その言語を使う文化、非言語行動などを含めて文脈の中で習得するのが好ましいということだ。

例えば日本語クラスにおいてその日に教える文法項目があったとする。教師としては渾身の力をこめて文法を導入し、それを使う状況を設定し、学生にその文法を使った会話をさせ、その文法を含む文を作ってもらおうとする。動詞の使役形を導入する場合、まず原形を使役形に直す練習をし、「先生が学生に宿題をさせました」というような文章をたくさん作らせるなどした後に「～させてください」の形を勉強する、というのが通常の方法であろう。しかし、その授業中に学生がトイレに行きたくなったとする。そこで習った文法を使って「トイレに行かせてください」と言えたとしたら「文脈化」に成功したともいえる。そこで新出文法を使えた学生はそれを自分のものとし、他の場面でも「～させてください」という言い方を自分のものにすることができるだろう。そのパフォーマンスをいかに文化的に自然に身につけることができるかが日本語クラスにおける課題であり、学習者の最終目標でもある。

2.2 「パフォームド・カルチャー」という考え方

日本語学習者にとって日本語が「第二言語」であるように、日本の文化は「第二文化」だということができる。留学している場合は第二文化に深く触れることができるが、自国にいながら日本語を学ぶ場合はクラス内で作り出される疑似的「日本文化」を経験しなければならないことになる。なぜなら、言葉と文化とは切っても切り離せない関係にあるからだ。「言語が上達するとき、私たちの文化理解も進んでいる」（Walker & Noda, 2000）のである。

Hammerly（1982）は「行動的文化」の重要性を説いている。つまり、文化とは実際に行動してみて身につくものであり、決して講義で文化について習った机上の知識だけでは文化を習得したことにはならない、という（Hammerly 1982, 514–515）。

その考え方を根底として、Walker & Noda（2000）は、第二文化を習得する過程を言語習得の一部分と位置づけ、クラス内で体験する文化やある文化の中でできるパフォーマンスのレパートリーを広げることを目指すという考え方を「パフォームド・カルチャー」と名付けた。パフォームド・カルチャーとはいわば第二文化への参加であり、文化が期待することをどこまで認知できるか、どこまで文化的に正しい行動を機能させられるかが重要な鍵となる[2)]。パフォームド・カ

ルチャーを会得する試みを「パフォームド・カルチャー・アプローチ：PCA」と名付け、パフォームド・カルチャー・アプローチにおいて学習者が学ぶのは言語記号や言語知識だけではなく、パフォーマンスであり、クラス活動というのは本番のパフォーマンスのリハーサルであるともいえる、と野田は述べている[3)]。パフォームド・カルチャー・アプローチは「パフォーマンスの要素に行動や思考のベースとなる文化を取り入れることで対象文化の世界観を記憶に構築し、単なる意思の疎通を超えた、対象文化への意味ある参加を言語学習の目的とするもの」と位置づけられており、「体験学習という学習理論をベースにした」ものである（野田 2015, 48）。

筆者がよく経験することは、日本語のクラスにおいて日本語を対象言語として習いながら、例えば欧米人の学生の集まりの場合、欧米の文化を持ってきたまま言葉だけを習おうとする態度があるということである。例えばクラスを中座する場合、日本では先生に一言声をかけてから教室を出るのが常識であるが、欧米では自由に教室を出ることは当たり前に許されているようなので、何も言わずに教室を出ていく、ということが普通に行われている。「日本の文化では一言断るのが普通です」とわざわざ説明する必要がある。Walker & Noda（2000）によると、「外国語教授者が対峙する目標とは、将来起こるであろう母語話者との予測不能なコミュニケーションにおいていかに教室内で学んだことが生かせるか、ということ」である。従って、言葉を習得すると同時にその文化を習得し、教室外の予測不能な出来事においてなるべく文化的に正しい反応をするべくその方法を習得することが言語教育にも求められているのである。

2.3　パフォーマンスウォッチング活動

2.3.1　第二文化の蓄積のサイクル

パフォーマンスウォッチング活動は、図 1 の「第二文化の蓄積のサイクル」と呼ばれるモデルが背景となっている（Walker & Noda, 2000, 197; Noda 2007, 301）。

第二文化の習得は第二言語の習得と同じで、ある一線上をまっすぐ進むというわけではなく、コイルのようにサイクル上に回りながら進歩していくものである。図 1 は「第二文化の蓄積のサイクル」を示している（Walker & Noda, 2000, 197）。図 1 において、左上の△はペルソナ、つまりそのパフォーマンスをする人を指す。右上の○と□が重なったものは「第二文化の世界観」を示す。つまり、第二文化に参加し、それを機能させることにより、その人と真ん中の○、「文化と言語のメモリー（知識、記憶）」に影響を与える。そこで得た第二文化の知識が真ん中の□、つまりパフォーマンス（ゲーム）という行動に影響を与える。そのパフォーマンスが物語の記憶（真ん中下の○）を生み出し、それが右下の□の「蓄積」となる。蓄積された物語（ストーリー）がまたテーマ（サガ、ケース）に応用され、それがまた第二文化の世界観に影響を与える、というようなサイクルをたどる[4)]。つまり、学んだ文化を記憶に残し、今まで蓄積した記憶と照らし合わせてそれをパフォーマンスに生かしていく、という過程をたどりながら第二文化を習得していく、ということである（Walker & Noda, 2000, 197）。

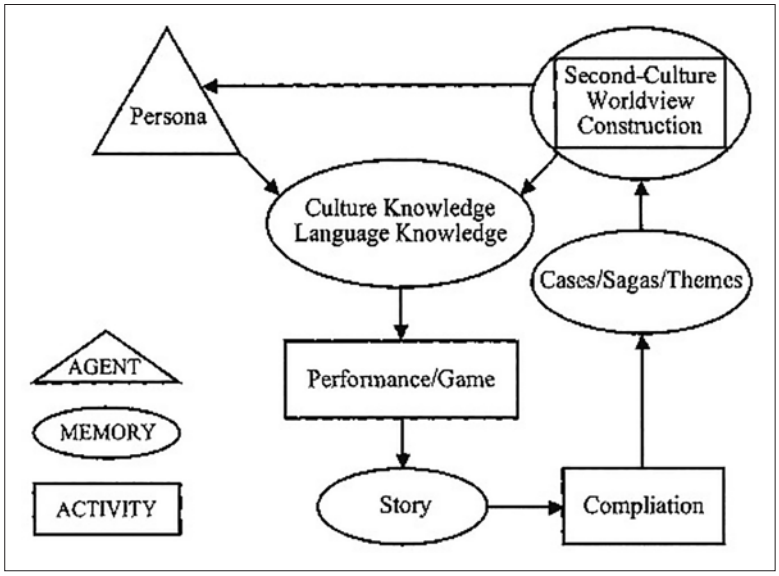

図 1 「第二文化の蓄積のサイクル」Walker & Noda（2000, 197），Noda（2007, 301）

2.3.2　パフォーマンスウォッチング活動の実例

パフォーマンスが実際にどのように行われているかを記録・分析するのがパフォーマンスウォッチング活動である[5)]。パフォーマンスウォッチング活動は次の 4 段階を経て分析される。

1）自然に発生するパフォーマンスをとらえる。
2）スクリプトを記録する。
3）パフォーマンスを分析する。
4）タイトルをつける。

1）では、まず、3 つ程度の二者のやり取り、つまり 6 つぐらいの発話を傍観者が観察し、記録する。（スピーチなどを記録する場合もある。）2）においては実際の言語行動を書き取る。3）においてはパフォーマンスの 5 要素を用いて発話がどのようなストーリーとして記憶されるのか、を分析する。4）においては、タイトルをつける。傍観者の視点を取るのか話者のどちらかの視点を取るのかは記録者の自由である。その結果、日本語話者が様々な場面で用いているストラテジーをパフォーマンスの要素を使って分析することによって意識することができ、また、これを日本語学習者がする場合には報告能力やナレーション力の育成にも役立つ（野田 2015, 49）。ただし、ある程度学習が進んだレベルでないとパフォーマンスウォッチング活動を実行することは難しいということである（野田 2015, 49）。

このように、パフォーマンスウォッチング活動では実際の発話を記録し、パフォーマンスの 5 要素（特定の時間的状況・特定の場・特定の役割（立場）・特定の傍観者（パフォーマンスを記

録する人）・特定の行動（スクリプト））に照らし合わせてどのようなストーリーとして記憶されるのかを考察する。公開講演会において提示された一例は、ある外国人のスピーチであった。日本に留学して音の氾濫に驚いた、という内容であるが、これは以下のように分析された。

タイトル「騒音・不便への対応 ── 音の暴力」
サガ：静けさを求める外国人
ケース：迷惑・失望・あきらめ
ジャンル：スピーカーの音
テーマ：迷惑

このように、スピーチまたは会話のやり取りを記録し、それを分析することによってそのやり取りの性格が明らかになり、日本語の自然なパフォーマンスのあり方が明確になる。外国人のスピーチにおいては、その外国人の第二言語および第二文化の習得状況も分析できる。この手法をオハイオ州立大学東アジア言語文学学科の大学院では、中級以上の言語学習者（主に中国語と日本語）の授業の一環として取り入れているということである[6)]。

3.　パフォーマンスウォッチング活動に基づいた研究・実践例

3.1　留学先におけるパフォーマンスウォッチング活動

中国へ留学したアメリカ人学生が中国語のパフォーマンスウォッチング活動をした報告もある。8 週間の留学において 10 人の学生により 21 個のパフォーマンスが報告され、その結果が報告された。結果として、パフォーマンスウォッチのレポートを書くことで学習者の学習が促進されたとのことである。母国語話者の自然な話を聞き、書きとること、それを口頭で発表すること、先生に指導やフィードバックを受けること、母国語話者とコミュニケーションを取ること、などを含めて第二言語習得、そして第二文化習得にとって非常に有意義であったという（Cornelius 2015, 148）。

3.2　外国語学習者と自閉症スペクトラム障害者との学び方の共通性

自閉症スペクトラム障害は社会性とコミュニケーションの障害であるが、コミュニケーションの方法を工夫するとコミュニケーションの効果が上がることが認められている（佐々木 2008）。また、自閉症スペクトラム障害を持つ人の社会性を向上させるためにさまざまな工夫がなされており（Ochs et al. 2004）、その方法がパフォーマンスウォッチング活動を含む活動による外国語学習（この場合は中国語学習）や第二言語習得、第二文化習得と共通性を持っているとの指摘がある（Wayne 2017）。今後の研究の成果を待ちたい。

3.3　日本語クラスでの活用の可能性

日本における日本語授業の一環としても、パフォーマンスウォッチング活動の手法を取り入れることができるであろう。パフォーマンスの 5 要素を明確に記述し、タイトルをつけてそれをクラスで発表する、という活動をすれば、お互いの見つけてきたやり取りを題材に学ぶこともできるし、そこから談話分析など将来の研究材料とできる可能性もある。日本に留学していると日本語の母国語話者が周りにたくさんいるという環境にいるため、自国で同じ活動をするよりもはるかに多くのパフォーマンスに触れることができる。授業時間外の言語使用活動をプログラムで促進することにより、留学プログラム中の第二言語使用の頻度を高くできるという研究もある（Dewey 2014, 59）。ただし難点もあり、1）話すスピードに加減がないこと、2）話の当事者と共有している知識に限りがあること、3）地域によっては方言があること、また、4）見るからに「外人」なのでそっと話を聞くのが難しかった、と報告した学生もいたように（野田 2015, 56）、パフォーマンスウォッチングをする環境に限界があることが挙げられる。学生の習熟度レベル、興味関心、置かれた状況などにより柔軟に対応しつつパフォーマンスウォッチング活動の手法を取り入れていくと、よりよい成果が得られると思われる。

4.　おわりに　── 日本語教育への提言 ──

外国語を教える教師であれば誰でも、文法的にも文化的にも自然な形で言語を習得してほしいと願うであろう。しかし、教室内の活動だけでそれを求めるのは難しいともいえる。例えば教室内ではしばしば教師主導のインターアクションが行われるため、「教師と学習者間で真の情報のやりとりはほとんどな」く、「教師と学習者間には相互を理解しようとする必要性がなく、意味交渉があまり怒らない」と言われている（小柳 2004, 100）。

Walker & Noda（2000）によって外国語（中国語・日本語）教授法の一環として生み出された「パフォーマンスウォッチング活動」は（Cornelius 2015, 167）、パフォーマンスの分析によって得られる外国語習得の機会、パフォーマンス自体の分析による第二言語および第二文化の習得への活用など、自然な第二言語・第二文化習得のためのさまざまな可能性を秘めていると思う。

言語と文化は切り離せない。同様に言語習得と文化習得も切り離せない。言語とともに文化を習得する、特に留学中にその習得の可能性が広がることから、留学生の学習の一環として「パフォーマンスウォッチング活動」を取り入れることには一考の余地があると思う。それは教室内で文化を体験するパフォーマンス活動の促進にもつながるし、日本語のクラスにおいて同時に日本の文化を身につけていく一助にもなるのではないだろうか。

パフォーマンスウォッチング活動の日本における発展の可能性を信じ、今後の研究に期待したいと思う。

注

1）　2018 年 6 月 23 日立教大学異文化コミュニケーション学部主催「パフォーマンスウォッチング活動」講演より

2）　2018 年 6 月 23 日立教大学異文化コミュニケーション学部主催「パフォーマンスウォッチング活動」講演より

3）　2018 年 6 月 23 日立教大学異文化コミュニケーション学部主催「パフォーマンスウォッチング活動」講演より

4）　Walker & Noda（2000）の当時の図には「ケース・サガ」のみで「テーマ」は含まれていなかったが、その後の研究により「テーマ」が追加され、「ケース・サガ・テーマ」が同列となった。ここでは最新版を使用している。

5）　2018 年 6 月 23 日立教大学異文化コミュニケーション学部主催「パフォーマンスウォッチング活動」講演より

6）　2018 年 6 月 23 日立教大学異文化コミュニケーション学部主催「パフォーマンスウォッチング活動」講演より

参考文献

川口義一（2004）「学習者のための表現文法 ── 「文脈化」による「働きかける表現」と「語る表現の教育 ── 」『AJALT』27 国際日本語普及協会.

小柳かおる（2004）『日本語教師のための新しい言語習得概論』スリーエーネットワーク.

佐々木正美（2008）『自閉症児のための TEACCH ハンドブック』ヒューマンケアブックス.

野田眞理（2015）「フィールドガイドを使った留学カリキュラム」CATJ 第 25 回 Central Association of Teachers of Japanese Conference 2015 予稿集 フィンドレー大学. 38–60.

Christensen, Matthew B and Mari Noda（2002）A performance-based pedagogy for communicating in cultures: Training teachers for East Asian languages. National East Asian Languages.

Cornelius, Crista Lynn. 2015. Language Socialition through Performance Watch in a Chinese Study Abroad Context. M.A. Thesis. The Ohio State University. 1–171.

Dewey, Dan P. 2004. A critical look at the study abroad experience: Its role in Japanese language learning and how to prepare students. *Breeze* 30: 2–5.

Dewey, Dan P, Jennifer Bown, Wendy Baker, Rob A. Martinsen, Carrie Gold, and Dennis Eggett. 2014. Language use in six study abroad programs: An exploratory analysis of possible predictors. Language Learning 64（1）, 36–71.

Hammerly, Hector. 1985. An Integrated Theory of Language Teaching and Its Practical Consequences. Blaine. Wash.: Second Language Publications.

Kolb, David A. 1984. Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

Noda, Mari. 2007. Performed Culture: Cataloguing Culture Gains during Study Abroad, Japanese Language and Literature, Vol. 41, No. 2, Study Abroad for Advanced Skills（Oct., 2007）, 297–314.

Ochs, Elinor et al. 2004. Autism and the Social World: An Anthropological Perspective. Discourse studies, 6（2）, 147–183.

Walker, Galal. 2000. Performed culture: Learning to participate in another culture. Language policy and pedagogy: Essays in honor of A. Ronald Walton, ed. by Richard D. Lambert and Elana Shohamy, Philadelphia; Benjamins, 221–236.

Walker, Galal and Mari Noda（2000）Remembering the future : compiling knowledge of another culture. Reflecting on the past to shape the future. By Diane W Birckbichler and Robert M Terry, Lincolnwood, IL: National Textbook Company, 187–212.

Wayne, Rachel. 2017. Teaching Chinese as a Foreign Language through the Strategic Use of Visualization: Exploring Neuroscience and Autism Spectrum Disorder Research to Guide Change in Chinese Language Education. Ph.D Diss.（abstract）, The Ohio State University.